

## 宋代の動補構造 “V 教 (O) C” について

古 屋 昭 弘

## 1 はじめに

中國語の口語の文法史における最も複雑かつ興味深い問題のひとつに、動詞プラス補語の所謂「動補構造」の歴史的展開の問題がある。現代語に關して言えば、方言によって變種はあるものの、少なくとも北方標準語では、次のような三つの代表的な動補構造が存在する。

	〈肯定〉	(例)	〈否定〉	(例)
I	V C(O)	洗干净(衣服)	不/没 V C(O)	没洗干净(衣服)
II	(V O)V 得 C	(洗衣服)洗得干净	(V O)V 得不 C	(洗衣服)洗得不干净
III	V 得 C(O)	洗得干净(衣服)	V 不 C(O)	洗不干净(衣服)

V : 動詞, C : 補語, O : 客語 (賓語, 目的語)

このうち I と II の補語は通常それぞれ「結果補語」「程度補語」と呼ばれるが、その區別は上のような構造上の違いに基くものであって、結果と程度が意味上つねに判然と分けられるとは限らない。III の補語を「可能補語」と呼ぶことに問題はなからう。なお、客語を伴わない肯定式の場合、II と III とは一見同形となるが、補語に副詞がつくなど擴大可能な點で II は III と區別される。このほか「方向補語」があるが、「結果補語」に類似するので、暫く省略に従う。

これら三種を中心とする動補構造について、その發生と展開の歴史を探ることは興味あるテーマであり、すでに多くの論考が公けにされている。<sup>(1)</sup> ここではまず先人の研究を參考としながら、たとえば宋代において、これら三種に對應する構造としていかなる諸形式があったかを、代表的なもののみ以下にまとめてみたい。例は『朱子語類』より。

	〈肯定〉	(例)	〈否定〉	(例)
I	V C(O)	(放緩 刷刮淨了那心)	不/不曾V C(O)	不說破
	V O C	見道理明	V(O)未/不C	思量未透 <sup>(2)</sup>
II	V得(O)C	(教誨得如此 掃得小處淨潔)	V得(O)不C	(見得不完全 看得義理不精)
III	V得(O)	記得	V不得(O)	(記不得 當不得小學)
			V不C	誦不熟
	V得(O)C	(誦得熟 看得道理盡)	V O不得	滋潤他不得
			V O不C	看道理不盡

現代北方標準語と較べて目立つ特徴のひとつは、客語が時に補語の前方つまり動詞と補語の間に位置しうるといふ点である。その結果、V得Cのみならず、客語を持つ場合つまりV得OCの場合にも、IIとIIIが同形となる可能性が生じている。IIの補語が副詞などで擴大された時のみ両者は區別され、意味の上からだけでは判別に迷うことがしばしばである。また、IのVC(O)とIIIのV得(O)も、Iの補語が「得」である場合、その區別は文脈に頼るほかない。上掲の諸形式は主要なものみに止めたが、實際はこのほかにも、可能を表すであろう様々な形式、たとえば、不V得O(不濟得事)、不VC得(不做到得)、VC不得(消鑠盡不得)、不V得C(不湊得着)、VO得C(做事得重)、V不得OC(喫不得這酒成)、VCO不得(放下這敬不得)<sup>(3)</sup>などが現れる。しかし、それぞれ出現頻度は極く低い。

本稿では、宋代においてかなり活動的だったと思われるにも拘らず今まで論及されることの少なかった動補構造“V教(O)C”の形式を取りあげ、口語の文法史の中でそれがいかなる位置を占めるかについて、新しい資料も加えつつ、考えてみたいと思う。

## 2 三言における“V教C”

香坂順一氏の「中國近世語ノート」47“教乾…”(香坂1983所收, p. 73-75)の項は、“V教(O)C”に言及する数少ない論考のひとつである。そこに挙げられているのは以下の4例である。

- ①又有豁濕了身上衣服的，都在下浦橋邊攪擠教乾（『警世通言』卷23「樂小舍拈生覓偶」，傍點引用者，以下同）
- ②趙正先走上岸，脫下衣裳擠教乾（『古今小說』卷36「宋四公大鬧禁魂張」）
- ③懷中取出一管筆來，把津唾潤教濕了（同上）
- ④又去菜擔子上摘些葉子，和米和葉子，安在口裏，一處嚼教碎（同上）

ここでは「動詞+教+状態動詞」（傍點箇所）の型しか現れないが，たとえば例④を「一處嚼，教碎」のように切って，「教」を純粹な使役動詞と解釋するのは，口語のリズムとしていかにも無理があり，ここはやはり“V教C”の動補構造，即ち「教」が接辭化しつつあるところの，かなり安定した文法形式を成していたと見るのが自然であろう。

香坂氏の論考では「一般に“動詞+補語”構造のものは，動詞によって表される行爲の結果を期待するものであるから，意味的には使役となる。“把濕衣裳曬乾”という場合，“曬衣裳，使它乾”という意味をもつことになる」と指摘したのち，動詞の直後に「使役の動詞（介詞）」が置かれた上記4例については，「明らかに破格ではあるが，同時に“教”が原義を失って使役の機能だけを意識させた例として興味がある」としている。更に「《三言》のことば」（香坂1983所収，p. 419）でも「これらは“擠乾”“嚼碎”“潤濕”とするだけで十分なのであって……このような語法がなぜこの巻（古今小説巻36——引用者）にだけ突如として現れたのか，私にはわからない」と述べて，V教C型とVC型の近親性に言及している。これら4例が見える『古今小説』巻36と『警世通言』巻23に関しては，前者がほぼ宋代の話本に間違いのないこと，後者も宋代のものと充分みなしうることを論じている。

勿論，それらが宋人話本だとしても明代に手が加えられている可能性は否定できないが，以下に述べる如く，V教C型は，元明の資料に現れることこそ稀であるが，『朱子語類』その他宋代の資料には散見され，少なくともこれら4例を，明代に手をいれられた結果新たに出現したものとみなすことは困難である。

### 3 朱子語類における“V教(O)C”

V教Cの見られた三言中の二作品が宋代の話本であることを裏付けるかのよ

うに、『朱子語類』(1270年成立)にはV教C, および客語を伴うV教OCが散見する。清代の『朱子全書』を資料として宋代の口語を研究した G. Kallgren 1958は、「教」の項(p. 58)でV教(O)C型のみを取りあげ、その例として以下のものを挙げている。Kallgren による英譯と共に引用してみたい。

- ⑤只要提教它醒(2: 5a)<sup>(4)</sup> [you must just arouse it (the mind)]
- ⑥看教心下是非分明(3: 27a) [and recognize clearly the right and the wrong in one's mind]
- ⑦須是果決做教成(15: 17a) [then one must daringly accomplish it]
- ⑧須著思量教了(2: 23b) [we must think it over]
- ⑨要分別教十分分明(3: 11a) [everything must be clearly distinguished]

そして「現代語の用法とは異なって、朱熹は明らかに“教”を主動詞のあとに置かれた助動詞として、行爲が完了したか或いは結果をもたらしたことを表すために用いている」と言い、また「朱熹は彼の口語において、この用法の“教”を實によく使っている」と指摘した。

そこで試みに、朱子語類においてV教(O)Cがどの程度の頻度で現れるかを、「學」に関する朱子の言葉を類聚した巻7~13に範圍を限って調査してみた。参考にV得(O)Cなど他の主要な動補構造の出現(延べ)回数も示す。

V教(O)C ……21	V不C ……38
VOC ……10	V不得(O) ……39
V得OC* ……51	VO不C* ……15
V得C* ……173	VO不得 ……14
V得(O)* ……328	

(asteriskを附したものは、可能か結果・程度かを特に分けずに勘定した。)

以上からもV教(O)Cが他の形式と較べて決して稀な存在ではないことがわかる。この21例を以下に列挙し、G. Kallgren の挙げた例と併せて検討してみたい。

“V教OC”(下線: V, 白ヌキの圈点: “教”, 點線: O, 以下同)

- ⑩須是先築教基址堅牢(8, 209)
- ⑪須就源頭看教大底道理透關(8, 209)
- ⑫要緊只是看教大底道理分明(8, 210)
- ⑬學者須養教氣宇開闊弘毅(8, 230)

⑭看教心下是非分明 (9, 248=⑥)

⑮不如放下了文字，待打疊教意思靜了，却去看 (11, 281)

⑯今却有集注了，且可傍本看教心熟 (11, 295)

⑰但只令放教意思靜，便了 (12, 345)

⑱放教脚下實 (13, 355)

“V教C”

⑲須……方好用微微火養教成就 (8, 220)

⑳譬如煎藥，先猛火煎教百沸大滾 (8, 220)

㉑須是向自身上體認教分明 (8, 227)

㉒只管恁地逐項窮教到極至處 (9, 246)

㉓看教平闊，四方八面都見 (9, 250)

㉔猛施工夫，理會子細，讀誦教熟 (10, 262)

㉕須是細嚼教爛，則滋味自出 (10, 265)

㉖須是將本文熟讀，字字咀嚼教有味 (11, 313)

㉗須……令徹頭徹尾讀教精熟 (11, 303)

㉘須是體驗教自分明 (12, 319)

㉙或此事思量未透，須着思量教了 (12, 343=⑧)

㉚須着意看教分明 (13, 359)

以上の例<sup>5)</sup>を通覽して伺われることは、V教(O)Cが宋代、少なくとも朱子或いはその弟子たちの言語において、生成能力旺盛な文法形式として息づいていたであろうことである。構造上はV得(O)Cに類似し、意味の上からも結果・程度を表すことが明らかである。VC(O)やVOCとも共通する点が多い。V得(O)Cは可能の意味を表すこともあるが、V教(O)Cの場合、⑨「分別教十分分明」⑳「體驗教自分明」において補語の形容詞が副詞を伴うこと、また㉒「窮教到極至處」<sup>6)</sup>㉖「咀嚼教有味」において補語が動客構造を成すこと等から見て、可能の意味は表していないと思われる。今までの例から歸納するかぎり、V教(O)Cでは、動詞が他動詞的であること、換言すれば客語となりうる受事者が存在することが成立の前提である。客語を伴わない場合も受事者が何であるかは文脈から容易に判断される。そして補語が表すのは動詞の行爲によって生じる受事者の状況である。朱子語類では「須」を伴う勧誘・願望（命令を含

む)の口調を帯びた文の中で使われることが多いが、恐らくそれは、説教調の文脈が多くなりがちな語録の性格に由来するものであろう。三言の4例は單に已に生じた結果を表すのみであり、勧誘・願望の文とV教(O)Cの間に絶對的な關連はないものと思われる。ここでは、已然の文脈よりも未然の文脈に使われることが多いことを指摘するに止めたい。<sup>(7)</sup>

以上のように、V教(O)Cは、宋代成立と推定される話本および朱子語類に見えるわけであるが、今までのところ宋以前あるいは宋以後の一般の口語資料中にはほとんど見出されていない。わずかに張相1962『詩詞曲語辭匯釋』「教(二)」の項(p. 117)に引かれた高觀國の「蘭陵王」詞に、次のようなV教OC型らしきものが見られるが、これも南宋の作品である。

①只愁入夜東風惡，怕催教花放，遣將花落(『全宋詞』，遣を趁に作る)

ここの「怕」は襯字であり、意味上からもリズムの上からも「怕催／教花放」でなく「怕／催教花放」と切れるため、「教」が接辭化しつつあることがわかる。張相もここを「催得花放」(花が咲くのを催す)と解釋する。なお、それと對を成す「遣將花落」(花が散るのをせかす)において「將」が「教」や「得」と類似する働きをしていることも注目される。

詞のみならず、禪の語録についても全面的な調査が必要であるが、ここでは偶々目についたものを挙げうるのみである。『碧巖錄』に見える以下の例<sup>(8)</sup>がそれである。

②鑊湯爐炭吹教滅，劍樹刀山喝便推(上，p. 108)

③和尚何不穿鑿教成一株樹去，與後人爲陰涼(上，p. 160)

④放教灑灑落落地(上，p. 254)

いずれも評唱の部分に現れるもの、作者は宋の圓悟(1063—1135)である。

このほか、G. Kallgren 1958によれば(p. 58)白居易の詩にも「教」の同様の用法が見られるとのこと、唐代の資料も精査する必要があるとはいえ、宋代に集中的に現れる語法であることに間違いはなからう。元明以降の資料に出現する可能性は極く低いと思われる。しかし、明代のものとして、この構造の散見される資料が全くないというわけでもない。

#### 4 說唱詞話における“V交(O)C”

1967年、嘉定縣の明代の墓から、成化年間(1465—1487)刊の説唱文學の版本10數種(ほか戯曲1種)が出土した。その中に、元明の口語資料に見出しがたかったV教(O)Cの構造が、わずかながら見られるのである。ただし、表記上は使役の「教」の異體「交」が使われている。まず10數種の說唱詞話におけるV交(O)Cの分布状況から見てみたい。波線は略稱。

V交(O)C	
新編全相說唱足本花關索出身傳	0
新編全相說唱足本花關索認父傳	0
新編足本花關索下西川傳	0
新編全相說唱足本花關索貶雲南傳	0
新編說唱全相石郎駙馬傳	0
新刊全相唐薛仁貴跨海征遼故事	0
新刊全相說唱包待制出身傳	0
新刊全相說唱包龍圖陳州糶米記	2
新刊全相說唱足本仁宗認母傳	0
新編說唱包龍圖公案斷烏盆傳	5
新刊說唱包龍圖斷曹國舅公案傳	5
新刊全相說唱張文貴傳	1
新編說唱包龍圖斷白虎精傳	2
全相說唱師官受妻劉都賽上元十五夜看燈傳	3
新刊全相鶯哥孝義傳	0
新刊全相說唱開宗義富貴孝義傳	0

}

花關索傳

}

「包公もの」

興味深いのは、V交(O)Cの見える作品がすべて宋代の名裁判官包拯を主人公とする所謂「包公もの」であることである。以下、全例を挙げる。(下線：V, 白ヌキの圈點：“交”, 點線：O)

- ㊸秀才便買一瓶酒 買酒子細看交眞 陳14 a 10
- ㊹街上買賣依時價 含冤負屈折交平 陳18 a 18
- ㊺伏願相公教交照察 高臺明鏡斷交情(清) 烏14 a 1

- ③潘成見説言叫好 烏盆今且聽<sub>交</sub>眞 烏14 b 6
- ③烏盆當下將言説 大及(郎?)今且聽<sub>交</sub>眞 烏14 b 6
- ④烏盆又乃將言説 若言大及(郎?)聽<sub>交</sub>眞 烏15 b 14
- ④今朝若不招情罪 打<sub>交</sub>皮破血淋身 烏20 b 12
- ④包相向前而便奏 我王聖上聽<sub>交</sub>眞 曹7 a 1
- ④鬼魂一々從頭説 相公仔細聽<sub>交</sub>眞 曹11 b 1
- ④叫道旋風來告狀 相公勾你斷<sub>交</sub>青(清) 曹10 b 9
- ④今日皇親來到此 相公與我斷<sub>交</sub>清 曹30 a 1
- ④微臣掌管開封府 只依王法斷<sub>交</sub>清 曹40 a 1
- ④伏望相公親爲主 可憐與我斷<sub>交</sub>清 張27 a 11
- ④不知甚人謀殺了 高堂明竟(鏡)斷<sub>交</sub>清 白7 a 13
- ④取出親妻來還我 高堂明竟(鏡)斷<sub>交</sub>清 白7 b 7
- ⑤怎見君王多有道 駕前文武説<sub>交</sub>眞 劉1 b 12
- ⑤百草根中分那姓 從頭一々説<sub>交</sub>眞 劉17 b 6
- ⑤王丞宰相前來奏 我王聖上聽<sub>交</sub>眞 劉20 b 4

まず「交」の表記について考えておくと、太田辰夫1958『中國語歴史文法』には「唐詩などでは使役の意味の《教》は平聲によみ、宋以後の破讀を説いたものでも平聲とする」「《教》は唐代では《交》ともかかれた」(p. 241)とあり、Zograf 1979にも、より具體的に、敦煌變文ではほとんどすべて「交」が、水滸傳では主に「教」、時に「叫」が、また元朝秘史では「教」が使われる(p. 265)とある。ちなみに、同じく太田1958によれば、宋元までは「叫」は「呼ぶ」という意味を残して、使役の「教」となお區別され、「叫」が純然たる使役の意味を持ち「教」と混同するようになるのは明代以降とのことである。「教」が唐詩で平聲だというのは、例えば「悔教夫婿覓封侯」のような詩句における平仄の配置からわかることであり、朱子語類のV教(O)Cの「教」も當然平聲だったと思われる。説唱詞話でも「交」と表記されるからには平聲とみて間違いない。そもそも説唱詞話において、七言の唱の部分には、それほど嚴格でないにせよ平仄に関して「二六同、二四不同」に従う傾向が顯著であり、上の例でも、ほぼすべての場合において、平聲が要求される位置に「交」が現れている。反対に、類似の表現であっても次のように仄聲が要求される位置では「得」が現



れている。

㊸説得眞時斷得眞 曹23 a 8

㊹件件依條斷得青(清) 曹43 b 4

さて、諸例の検討に移ると、朱子語類のV教(O)Cの各要素の多彩さとはうって變って、こちらでは類型的な表現が目立つ。整理すればV交Cは「看交眞」(しかと見る)、「聽交眞」(しかと聞く)、「説交眞」(しかと言う)、「折交平」(公平に換算する?)、「斷交清」(正しく裁く)の5種、V交OCは「打交皮破」(皮膚が破れるまでたたく)の1種のみとなる。しかし、それも七言句を中心とした説唱演藝の宿命としての、表現の類型化に由來するものであろう。「打交皮破」などはV交OCがまだまだ生産的であることを物語る。「交」が十分に接辭化していることは、次のような類型表現<sup>9)</sup>において「交」の替りに「得」が使われていることから伺われる。

㊺一邊五十黃荆杖 打得皮破血淋身 曹17 b 14

ここは平仄から言えば「交」の方がふさわしいが、「打交～」が未然の文に、「打得～」が已然の文に使われているという違いはある。この事とも関連するが、注意すべきは、朱子語類と同様、V交(O)Cのほとんどが勧誘・願望(命令も含む)の口調を帯びた文に現れるという点である。已に發生した動作の結果を表す叙述文と見られるものは、㊻「買酒子細看交眞」(酒を買ってしかと見ると)、㊼「只依王法斷交清」(王法により正しく處斷したまでです)の2例に過ぎない。

ここで、なぜ説唱詞話に突如としてV交(O)Cが現れるのかという問題を考えねばならない。「烏盆傳」には「成化壬辰歲季秋書林永順堂刊行」の刊記があり、「白虎精傳」にも「永順堂」の名が見える。つまり、これら説唱詞話が明成化年間の壬辰の年(1472)を前後する時期到北京の永順堂で「新編・新刊」として刊行されたものであることは確實である。ただ「新編」や「新刊」の語にそれほどこだわる必要がないことは、「花關索」の四傳が「新編」を謳いながら、その「出身傳」卷末の刊記のみ「重刊」となっていることなどからもわかる。刊行は明代でも成立までが明代とは勿論限らない。實際「花關索傳」は他の點から言っても元代の作品である可能性が高い。それでは、包公もの場合はどうであろうか。以下、V交(O)C型が現れることを手掛りとして、それ

らの作品が明以前に成立したと考えるか否かを考えてみたい。

包拯の事蹟が宋代より已に物語化し始めていたことは、多くの資料(堀1983など参照)から見て明らかであるが、それがまず語り物に始まり、更に戯曲小説に波及していったであろうことも想像にかたくない。警世通言卷13「三現身包龍圖斷冤」が南宋話本の原形を留めるものと考證されていること<sup>40)</sup>等も、その傍證となる。「語りあり唱あり」の説唱演藝も、廣い意味では語り物の一種とみなすことができる。宋人話本の中でも『清平山堂話本』所收の「快嘴李翠蓮記」などは、譚1985にそれを「陶真體」かと疑う如く、説唱體に類するものである。語りのみの説書體と、唱も含む説唱體はほぼ同時期に發生したものと推測されるが、それはさておき、語りものの常として説唱演藝も、時世に敏感に對應する一方、その演じ方の基本については、初期の語り口をそのまま繼承するなど保守的な面もあったに違いない。「看交眞」「聽交眞」「説交眞」等はともかくとして、「斷交清」「打交皮破」等はいかにも裁判に關連して使われそうな表現である。包拯の物語の説唱に際して、これらの表現、特に「高臺明鏡斷交清」のような平仄の叶った慣用句が、宋代に出現したのち時代を超えて使われ續けたとしても不思議はない。版本の保守性という問題もある。実際に語り唱われていたものが一旦讀み物として版刻されたのちは、時代に即應した細部の修正を経ずに、古い要素を留めつつ重刊されてゆくという狀況が充分ありえよう。包公ものを中心とする説唱詞話には、以下の如く、宋代の語法の特徴のひとつと言われる「打一V」の構造<sup>41)</sup>が幾つか見られるが、これもV交(O)C型の存在と相俟って、説唱詞話、特に包公ものの由來の古さを物語る。

打一洒(白5 b 1, 開24 a 10) 打一噴(張7 a 8) 打一擯(仁4 a 1) 打一推(仁14 a 11) 打一潑(開24 a 7)

このうち、「開」と略稱した「開宗義富貴孝義傳」のみ包公ものに屬さない。<sup>42)</sup>

## 5 V教(O)Cの發生

次にV教(O)C型發生の經緯について、意味上・構造上類似點の多いVC型及びV得(O)C型と關連させながら、考えてみたいと思う。

VC型は魏晉以降次第にその姿を現わすことが多くなったもので、客語をと

る場合は VCO と VOC の兩型がありえた。例えば：

⑤我且爲君搥碎黃鶴樓（李白「夏贈韋南陵冰」，周1958 p. 202）

⑥千朵萬朵壓枝低（杜甫「江畔獨步尋花」，周1958 p. 210）

VC 型において補語はふつう自動詞や形容詞により擔當される。そして王力 1958が VC 型を「使成式」(causative form)と呼び (p. 403), 例え「辯明」を「辯之使明」と解釋した (p. 406) ように, VC 型では, 補語を一旦は使役的に捉える必要がある（「打死」は「なぐって死ぬ」ではなく, 「なぐって死なせる」→「なぐり殺す」）。つまり VC のいわば「深層構造」<sup>14)</sup> に “V<sub>1</sub> 之使 V<sub>2</sub>” (V<sub>2</sub> は自動詞・形容詞) があるわけで, 「使」を口語的な使役動詞「教」に換えた “V 教 C” が表層に現れてもそれほど不思議ではない。特に客語が VC の間に挿入される VOC 型の場合, 動詞と補語が離れるため, 補語の使役化が強調されにくい。例え「見道理明」(道理を見てはっきりさせる→はっきり見る, 朱子語類11, 284) や「提案上藥囊起」(机の上の藥の袋を取って上にあがるようにする→取りあげる, 同11, 287) のように客語が長いほど補語が孤立する感を免れない。これを解決すべく「深層構造」から使役を表す要素を浮上させ, VOC 三者を緊密に結びつけることが想いつかれたのではなからうか。VOC 型を王力風に解釋すれば “V<sub>1</sub>O 使 OV<sub>2</sub>” となる。次に「使」を残したまま重複部分を消せば, 理論的には “V<sub>1</sub> 使 OV<sub>2</sub>” と “V<sub>1</sub>O 使 V<sub>2</sub>” が得られる。二番目の O を代名詞に置き換えれば “V<sub>1</sub>O 使之 V<sub>2</sub>” もありえよう。試みに VOC 型の「放心寬」(心を廣くさせる→安心する, 『清平山堂話本』「快嘴李翠蓮記」) を例として以上のことをまとめれば次のようである。<sup>14)</sup>

放心寬 “VOC” → \*放心教心寬 “V<sub>1</sub>O 使 OV<sub>2</sub>”

↓

a. 放 教心寬 “V<sub>1</sub> 使 OV<sub>2</sub>”

b. 放心教 寬 “V<sub>1</sub>O 使 V<sub>2</sub>”

c. 放心教它寬 “V<sub>1</sub>O 使之 V<sub>2</sub>”

このうち a の “V<sub>1</sub> 使 OV<sub>2</sub>” がそのまま, いわば「表層構造」として定着し, 客語も省略されうるようになったものが, V 教(O)C 型なのではあるまいか。なお, 朱子語類には実際に b 型や c 型の例も見られ, “V<sub>1</sub>O 使 OV<sub>2</sub>” のような

深層構造の存在を示唆するものとして興味深い。まずb型の例<sup>60</sup>：

- ⑤8却旋去裏面修治壁落教綿密(8, 209)  
 ⑤9仍參諸解傳說教通透(10, 256)  
 ⑥0不去子細考究義理教極分明(121, 4678)  
 ⑥1且要理會這箇教明白始得(130, 4986)

これらの例において「教」は已に純然たる使役動詞から接辭化の道へと一步踏み込んでいるかに見える。次にc型の例<sup>62</sup>：

- ⑥2只是提撕此心教它光明(12, 334)

この「教」は純然たる使役動詞と見るべきであろう。何と言っても「教」はa型の如くV<sub>1</sub>と直結した場合に最も接辭化しやすかったものと思われる。

V教(O)C型の定着に際しては、構造上類似するV得(O)C型からの類推作用も考えられる。そもそもV得(O)C型もVOC三者の結びつきを強める役割を果しつつ發展してきたものと推定されるが、文獻上それが頻繁に現れ始めるのはVC型よりだいぶあとの時期であり、特に盛行するのは宋代になってからのことと言われる。現代語の程度補語“(VO)V得C”と可能補語“V得C(O)”の双方に相當するため、結果・程度なのか可能なか判断に迷う場合が少なくない。先に挙げた⑫「看教大底道理分明」および⑬「養教氣宇開闊弘毅」と類似する用例を、同じく朱子語類から引いてみよう。

- ⑥3若見得大底道理分明，有病痛處也自會變移(8, 210)  
 ⑥4古人小學，教之以事，便自養得他心不知不覺自好了(8, 230)

⑥3は可能か結果・程度か判然としないが、⑥4は補語に狀況語が前置されているので、結果・程度を表すものと思われる。接辭の「得」は時に可能を、時に完了を表し、また時に結果・程度を引きだすマーカーとなるという具合に、その使用範囲の廣さは瞠目に値するが、「教」と類似するのは、そのうちの結果・程度の補語を導く接辭としての「得」である。V教(O)Cは明確に結果・程度のみを表しうる構造として、V得(O)Cの多面性、そして時にそこから生じる曖昧性を補うという役割も果たしたのではあるまいか。

地域の問題もある。福建を中心に活動した朱子は言うまでもなく、その弟子達も大多数が福建から江浙一帯を出身地とする南方人である。三言中の宋人話は南宋の都臨安の言語を反映すると考えて大過なからうし、詞の中にV教O

Cを使った高觀國も山陰（浙江紹興）の人である。『碧巖錄』の評唱の作者國悟は四川成都の人、主に南方で活動した。説唱詞話については花關索傳が吳語的要素を含むことを考證したことがある（古屋1985）。包公ものを始めとするその他の説唱詞話にも吳語的な假借や語彙が散見する。押韻状況など全般的に見て、北京の永順堂なる書肆によって刊行されたとはいえ、とても北方のものとは思えぬ様相を呈している。大雑把な議論になるが、恐らくV教(O)C型は南方に發祥し、一時期かなり普及しかけたものと推測される。

## 6 幻の文法構造

動補構造の歴史を概観してみると、唐から宋にかけての頃は、様々な形式が輩出し、その中で自ずと主流を占める形式が決まりつつあるものの、なおもそれに限らぬ多様な発展の可能性を秘めた時期であったと言えよう。

V教(O)C型もそのような多様な形式のひとつであるが、その宋代における出現頻度は、少なくとも朱子語類を見る限り、所謂「主流」の形式と較べて極端に低いとは決して言えない。今までの例から見て、V教(O)C型の補語は形容詞（時に二音節の）であることが多い。唐宋の頃までは、補語が形容詞であってしかも客語を伴う場合、動詞と補語が離れるVOC型をとることが多く、動詞と補語が密着したVCO型をとることは少ないようにみえる。VCO型の補語は動詞的なものが多い。また、V得OC型は補語が形容詞である場合、普通は結果・程度を表すものと思われるが、可能を表す場合との区別が構造上曖昧となりがちである。また、厳密な区別とは言えないが、結果・程度を表すV得(O)Cは已然の文脈に、V教(O)Cは願望・勧誘・命令などを含む未然の文脈に使われやすいという傾向がある。というわけで、V教(O)Cはそれなりの存在価値を持っており、その方向に沿って発展してゆく可能性を秘めていたものと思われる。しかし、宋以降の動補構造全體の発展はそれを許さなかった。

宋以降の展開に関しては、可能を表す動補構造（特にその否定式）の歴史を論じた Lamarre 1985に詳しい。それによれば、北方では已に元の頃から、可能を表す動補構造の否定式の構造は、現代語と同様のV不C O型（例：忘不下他）に統一されており、VO不Cが結果（未實現）も可能（實現不可能）も表しえた時期とは異なった状況が現れていた。一方、「得」を伴う肯定式も、結

果・程度を表す場合、動詞をくり返したり、「把」を使って客語を提前するなど、また可能を表す場合は否定式と平行した型にするなど、現代語と同様の状況への発展過程を辿る。時代を厳密に確定しないで筆者(古屋)なりに以上のことをまとめれば次のようである。<sup>65</sup>

〈否定〉	VO不C	$\left\{ \begin{array}{l} \text{未 實 現} \rightarrow [\text{沒(不)V C}] \\ \text{實現不可能} \rightarrow \text{V不C O} \end{array} \right.$
〈肯定〉	V得OC	$\left\{ \begin{array}{l} \text{結果・程度} \rightarrow \text{VOV得C} / \text{把OV得C} \\ \text{可 能} \rightarrow \text{V得CO} \end{array} \right.$

勿論、明清の白話小説にはなおもVO不Cが散見されるが、Lamarre 1985はそれを江南方言の影響と考える(p. 94)。北方方言の大きな流れとしては、V得OCの場合、補語の表す意味が結果・程度であるか可能であるかによって構造を分化させる方向へと進んでいたのである。また、VC型の場合、VOC型が明代には已に稀な存在となり、一方、VCO型は客語が形容詞(二音節のものも含め)であることも珍しくなくなる。<sup>66</sup> 様々な動補構造が共存しえた宋代までの混沌とした状況が、次第に整理統合(時には分化)の方向へと進むにつれて、V教(O)C型も徐々に自らの存在価値を失い、また地域的にも限られていたせいもあって、幻の構造として文献資料からは姿を消していったものと思われる。

最後に、現代諸方言において、動詞と補語の間に「叫」を挿入する方言のあることを指摘しておきたい。河南北部の獲嘉方言がそれである。賀巍1983は「兒化」に類した特殊な變韻現象を扱った論文であるが、そのうち形容詞の變韻に觸れた部分に「單音形容詞在“叫……些兒”的中間用D變韻母，整箇結構做動詞的補語，全句是命令句」との説明に續いて次のような例文が挙げられている(p. 20)。ここでは全21例のうちわかりやすい5例のみを引用する。變韻の記號は省略。

65 你跑叫快些兒

66 你喫叫飽些兒

67 你走叫快些兒

68 你把嘴張叫小些兒

69 糧食曬叫乾些兒再收

これらの文における「叫」が宋代の動補構造に見える接辭的な「教」や「交」と同様の働きをしていることは一見して明らかである。勿論、形容詞に必ず「些兒」がつくこと、動詞が「跑」や「走」など自動詞<sup>叫</sup>でもありうること、客語が「把」によって提前されるか、または主題化され文頭に置かれること、従って“V叫OC些兒”は恐らく存在しないであろうこと等、本稿のV教(O)Cとは異なる点もあるが、全體が命令文になるなど類似点が見られるのは興味深い。北方語に屬する獲嘉方言の“V叫C些兒”を宋代のV教(O)Cの末裔と斷定するのは早計に過ぎようし、独自の形成・發展を遂げたものとも考えうるとはいえ、雙方とも、結果を表す動補構造において補語が使役的に解釋されるという、同様の「深層構造」から發したものであろうことは疑いのないところである。今後の文獻調査と方言調査の競合的深化に期待したい。

注(1) 例えば、呂叔湘1944「與動詞後得與不有關之詞序問題」(呂1955所收)、太田1958、周1958、王1958、梅1981、志村1984、玄1985、Lamarre 1985など。

(2) V末CをVCの否定と見るのは、梅1981(p. 73)によったもの。

(3) これらのうち、「消鑠盡不得」と「做事得重」は『河南程氏遺書』からの、「喫不得這酒成」は『警世通言』からの例、他は朱子語類の例である。注(1)の呂1944論文よりの再引。

(4) この數字は G. Kallgren による『朱子全書』の卷數と頁數。以下、本稿で『朱子語類』を使う場合は、中文出版社刊行の成化本影印補修本により、卷數と中文出版社本の頁數を附す。朱子學大系第6卷『朱子語類』(明德出版社, 1981)も参照。なお、例⑥を朱子學大系では「這便着將前聖所說道理。所做様子看。教心下是非分明。」(p. 84)のように「看」と「教」の間で切っているが、和刻本が「看教スレバ心下ノ是非分明ナリ」と訓むのと同様、疑問。また、鹽見邦彦1985『朱子語類口語彙索引』(中文出版社)では「放教」と「填教」を採録するのみである。

(5) 和刻本では⑩「脚下ヲ放教シテ實ナラシム」、⑪「煎テ百沸大滾教(せし)メ」の如く構造を正しく捉えた訓み方もある一方、⑫「大ナル底ノ道理ヲ看教スレバ、分明ニ……」、⑬「思量ヲ着(し)テ了(おは)ラ教(し)ム」の如く誤讀した箇所も少なくない。以下、例文のうちV教(O)Cの部分のみ譯出しておく：⑩基礎を堅固に築く、⑪大きな道理をしかと見きわめる、⑫大きな道理をはっきりと見る、⑬氣概が壯大になるよう修行する、⑭心の中のは是非をはっきりと見る、⑮氣持を靜かに収める、⑯諳じるまで讀む(ここでは“心熟”全體でひとつの形容詞か)、⑰氣持を落ちつかせる、⑱足元をしっかりとさせる、⑲(丹藥をとり火で)煉りあげる、⑳(藥を)ぐつぐつ煮たてる、㉑(事を)はっきりと體得する、㉒(事物を)極限まで窮める、㉓廣く見渡す、㉔(百字分の本文を)すらすら言えるまで讀誦する、㉕(果物などを)グチャグチャになるまでよく嚙む、㉖味が出るまで咀嚼する、㉗

(書物を) すっかり頭に入るまで読む, ㊸ (これらを) 自ずとわかるようになるまで體驗する, ㊹ (この事を) 最後まで考えつくす, ㊺ (善惡を) 氣をいれてはっきりと見る。

- (6) ここと類似する表現「事事窮到極至處」(11, 292) では「教」が使われていない。現代語の文法では、このような“V+到+場所”の構造の「到」をどう解釋すべきか定論がない。“到+場所”が複合補語として動詞に連結しているという見方と、“V+到”が複合動詞を成し、單なる動客構造として“場所”を支配するという見方などが代表的であるが、本稿では假に前者の見方に従う。「窮得到道理透處」(11, 304) や「走得到半路」(警世通言卷33) の如く「得」が挿入されることもある。
- (7) このほか㊸㊹「須着思量教了」や㊺「令放教意思靜」の如く本來の使役動詞と「教」が共存する例が見られることも注意すべきであろう。これらの場合「着」や「令」はV教(O)C全體を使役化しており、當然のことながらここからも「教」にはその直前の動詞を使役化する力はないことがわかる。
- (8) 『碧巖錄』は岩波文庫本(朝比奈宗源譯註, 上下2冊, 1937年第1刷)による。譯: ㊸鍋の湯(をわかす) 爐の炭火を吹き消す, ㊹なぜ一本の木になるよう穿鑿(?)して, 後の世の人に木陰を作ってやらないのか, ㊺何事にもとらわれないようにする。㊺に似た例として「令」を用いた「放令閑閑地」(上, p. 259, 評唱)もある。
- (9) VOC型の類型表現も見られる: 誰人打你皮肉破 甚人打你血淋淋 曹23b6
- (10) 譚1985に指摘する如く南宋の『醉翁談錄』に挙げられた公案類の話本の中に「三現身」があり、警世通言卷13はそれを傳えたものと推定される。
- (11) 「打一V」については香坂1983所收「《三言》のこぼ」に詳述されている。なお、「打一看」(及び打一望)だけは明代でも使われるので、採録を控えた。
- (12) V交(O)C型こそ見られないものの「開宗義」も由來の古い作品であるという可能性は否定しえない。V交(O)Cや打一Vが他の作品に現れなかったのは偶然に過ぎないという考え方もありえようが、例えば、それらの現れない「石郎駙馬傳」には「上頭書了蒙古字」などの表現が見え、元代以降のものと推定されること等を考え併せると、やはりV交(O)Cや打一Vにはある程度「鑑定語」としての役割を期待してよいものと思われる。
- (13) 今井1985によれば、生成文法では、ある種の結果を表す動補構造の深層構造に、表層には現れない「使」の存在を認める考え方もあるそうである。また、張1981によれば、俚語では「穿破一雙襪子」の意味の句を、次の如く使役の要素を入れて言うこともあるという:
- |                  |                 |                  |                  |                 |                  |
|------------------|-----------------|------------------|------------------|-----------------|------------------|
| sup <sup>7</sup> | va <sup>3</sup> | huw <sup>3</sup> | put <sup>7</sup> | ku <sup>6</sup> | nuw <sup>6</sup> |
| 穿                | 襪子              | (使)              | 破                | 雙               | 一                |
- (14) 「使」が口語では「教」で現れるものと解釋する。注(8)にも觸れたとおり、「令」で現れることもある。以下、朱子語類の例をいくつか挙げる: 「不放令倒」〔舟を〕



逆行させないようにする, 8, 220), 「放令規模寬闊」(規模を廣くする, 13, 382)。ただし「放令」は已に使役を表す複合語に近くなっていると思われる。

- (15) 譯: ⑤⑧ (内側で) 壁を綿密に作る, ⑤⑨いろいろな傳注を参照しつくす, ⑥⑩義理をはっきりと考究する, ⑥⑪これをはっきりと理解する。ちなみに「得」の場合も, このこと平行する“V<sub>1</sub>O得V<sub>2</sub>”が現れるのは興味深い。例: 「亦是太以敬來做事得重」(河南程氏遺書, 周1958 p. 222)
- (16) 譯: ⑥⑫この心をよくつかみ, それを輝かせる。
- (17) 肯定のV得OC型と否定のVO不C型はもともと平行する構造ではないが, その歴史的展開に関しても平行的でない様相を見せることがある。例えば, 説唱詞話「花關索貶雲南傳」(1 a 19) では, 聲で墾(尙墻)を倒せるか否かについて, 肯定は「喝得尙墻倒」, 否定は「喝不倒尙墻」とある。
- (18) 朱子語類にもそのような例がないわけではない。例: 「看明白未讀底」(王力1958, p. 406)
- (19) ただし「跑步」や「走路」が動客構造だとすれば自動詞とも言い切れない。

#### 引用參照論著目録

Kallgren, G. 1958, *Studies in Sung Time Colloquial Chinese as Revealed Chu Hi's Ts'üan shu*. Stockholm.

香坂順一1983『白話語彙の研究』(光生館)

呂叔湘1955『漢語語法論文集』(科學出版社)

太田辰夫1958『中國語歴史文法』(江南書院)

志村良治1984『中國中世語法史研究』(三冬社)

譚正璧1985『話本與古劇』(重訂本, 譚尋補正)(上海古籍出版社)

王力1958『漢語史稿(中冊)』(科學出版社)

(Zograf) Зограф, И. Т. 1977, Среднекитайский язык. Москва.

古屋昭弘1984「説唱詞話『花關索傳』と明代の方言」(『中國文學研究』第10期)

玄幸子1985「敦煌變文に於けるV得について」(『中國語學』232)

賀巍1983「獲嘉方言的一種變韻」(『中國語言學報』第1期)

堀誠1983「四帝仁宗認母故事考——「抱粧盒」と「仁宗認母傳」」(『中國詩文論叢』第2集)

池田正子1978「『龍圖公案』類話考」(『中國文學研究』第4期)

今井敬子1985「「結果を表わす動補構造」の統辭法」(『中國語學』232)

Lamarre, C. 1985, Un problème d'ordre des mots en chinois vernaculaire: Quand et où s'est produit le changement Shuo ta bu guo > Shuo bu guo ta, *Cahiers de linguistique Asie orientale*, Vol. XIV n° 1.

梅祖麟1981「現代漢語完成貌句式和詞尾的來源」(『語言研究』創刊號)

澤田瑞穂1978「「四帝仁宗有道君」——明代説唱詞話の開場慣用語について——」(『中國文學研究』第4期)

張公瑾1981「傣語和漢語的一個語序問題」(『語言研究』創刊號)

周運明1958「漢語的使動性複式動詞」(『漢語論叢』“文史哲”叢刊第4輯)

#### 附記

本稿作成の過程で黄國營氏を始めとする多くの師友から助言を頂いた。この場を借りてお禮を申しあげたい。特に Christine Lamarre 氏からは関係資料の提供をも忝なくした。